

# 西朋

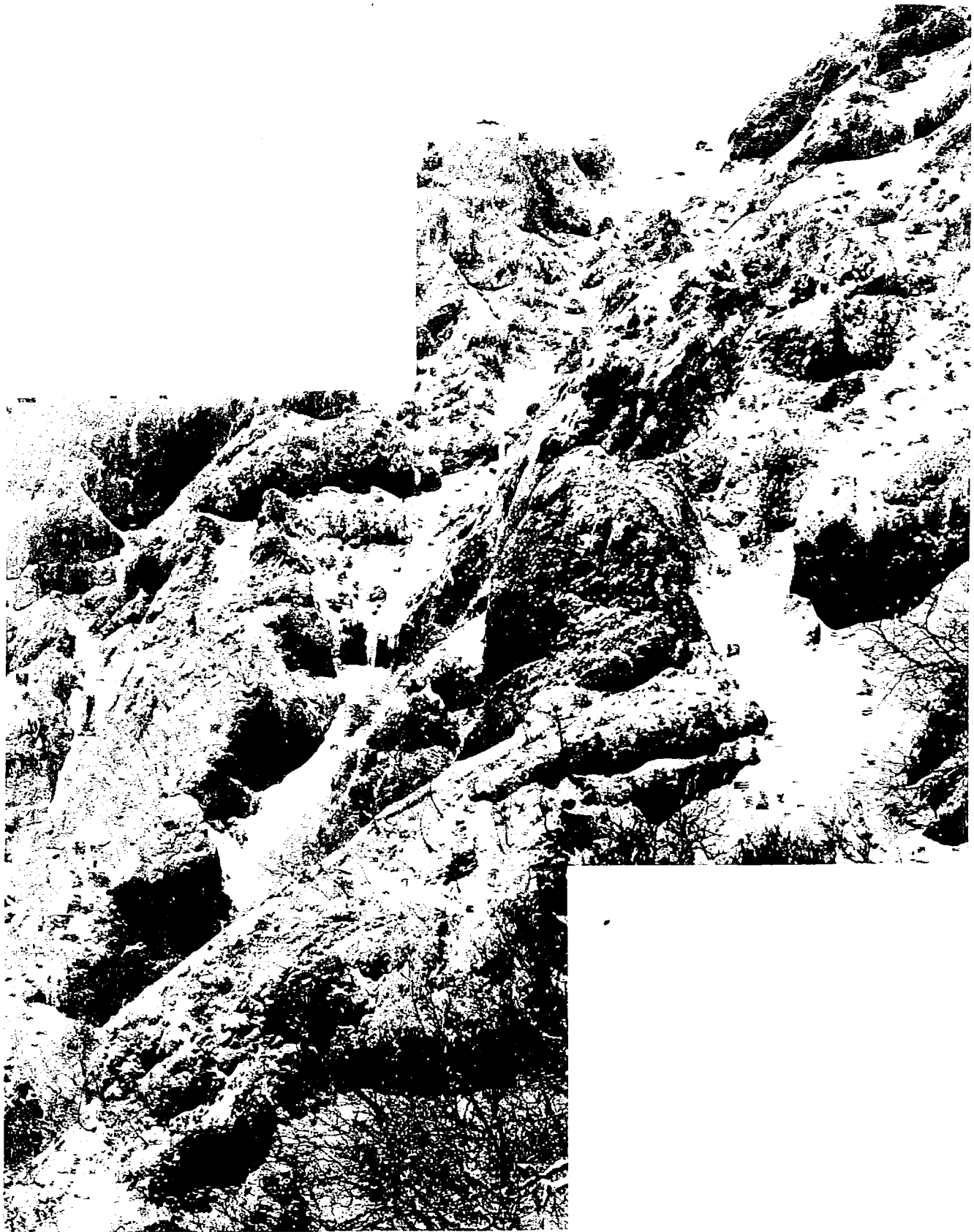
都立西高山岳部OB会

1958.MAR.

14

西朋登高会





# 断層への憂慮

林 武 志

六六年度を迎えて、会の動きも学生中心から、社会人中心に変わってきた。今迄は会員中社会人は少数であり、主流は学生であった。しかし、最近も、人数も社会人が学生を越え、主流は社会人となった。会の成長と共に、社会人が増えるのは当然である。

しかし、こゝで考へねばならないのは、現在の学生の力である。人数は社会人より少いのは当然であるが、それにしても少な過ぎるのではないだろうか。供給されるべき人間が少いのであるから直ちにふやすことはできないだろう。従って今できることは量の増加でなくして質の向上である。

現在の学生だけでは大きな目標に向うことは難しいと思われる。多くの時間を費すことのできる学生が充分に動き得ないことは、会にとつて大なる損失である。社会人中心の動きが生れても、決して学生中心の動きが消えるべきものではなく、ますます成長し、互いに校調して進まねばならない。しかし現在の状態では学生中心の動きが消されてしまう。こゝで学生諸君の奮起を望みたい。

岩だの氷雪だのと、むずかしいことはいわれない。先ず山に慣れてもらいたい。そして歩くこと。負荷に耐えることを充分身につけてもらいたい。山とはどういふものが知らないので話しにならない。山を歩けないのも困るし、自分の食う物も背負えないのも困る。少くとも、他人に迷惑をかけないだけのことは、身につけてもらいたい。又精神の鍛錬に大いに努力してもらいたい。人間の体力はそう簡単に参るものではない。むしろ体力より先に精神が参ってしまう。人間の体力は、それほど差のあるものではない。精神力の差により、見かけの体力の差が大きく現われるのである。この精神力は山に限らず、いかなる場合でも必要なものであるから、今後立派な人間として生きるためにも大いに充実させてもらいたい。

又才一線に立たれている方々も、よりよい会をつくるために、自己の向上と共に、後輩の指導に充分尽していただきたい。こゝで学生が弱体化してしまつと、会に大きな断層ができ、会が老化してしまふ可能性が大きい。後顧のうれいのなきやう、全会員努力しよう。

# 第五年度冬山

## 後立山縦走・爺岳東尾根

### 前言

昨年度スバリ岳西壁を目指したものの、オ一尾根はともかくとして、その主目標たるオニ尾根は吹きまくる風雪に一触したのみにて敗退の苦汁を喫した。アタック隊以外は、主稜を充分に歩くチャンスすら自ら得なかった。後立山で充分に主稜を歩いた後バリエーションを再考せねばならぬのである。しかしながら白馬より針ノ木に至る延々たる山稜は休暇の閑係上、一部縦走隊による五竜岳―針ノ木岳に縮少し、本隊は冬山ラッシュをさけて爺岳東面より鹿島槍意頭をサポートを兼ねて行うこととした。期間は十二月廿九日より一月十日とした。爺岳東尾根は一岩峰を有するのみの尾根ではあるが、敵隊もの嫌騷を極める冷側を敢えて敬遠し、何ら気がねなく山登りを楽しみたかったので他に理由はない。十二月二十九日縦走隊四名及びサポート二名が入山。サポート隊は三十一日、縦走隊と別れ、本隊に入る。本隊はB.Hを源次荒井氏宅とし、C.Iを白沢天狗上の峰とし、C.Iを爺岳頂上とした。隊名称は縦走隊をオ一隊とし、本隊をオニ、オ三隊とした。

### 人員

安藤 英弥	監督	28	山口 雄弘	24
田中 将利	リーダー	24	米野 弘躬	22
田中 奥	リーダー	24	松田 朝夫	24
町田 明	リーダー	24	成瀬 泰雄	23
笹田 英次	リーダー	24	鈴木 洵	22
林 武志	食糧	22	飯塚 康史	22
福田 宏二郎	器具	22	京田 守弘	20
小田 尚於	記録	22		
岡谷 徹	服装	22		

### 縦走隊(オ一隊)

### 記録

一二月二十九日(雪)

神城(九、〇〇)―遠見小屋(一三、〇〇)―三、〇〇)―小遠見  
(一六、〇〇)―C(一六、一〇)

盛大な見送りに励まされて才一隊の町田、林武、福田、関谷及びサ  
ポートの田中実、鈴木潤新宿発。夜明けごろ見えた青空も神城駅につ  
くころは小雪となる。高力入スキー場横雪ゼロ。右手の沢をつめる夏  
道をとる。雪は水気を含んでいさゝかぬれる。遠見小屋はスキー  
客でいっぱい。小屋からはワカンをつけて出発。尾根上にてで忠実  
にたどる。ヒザ程度のラッセル。やがて先行者のトレールを発見し大い  
にはかどる。小遠見と中遠見の最低鞍部に暮宮。今宵の積雪洞を掘る  
が、掘ればすぐ土がでる。止むを得ず四人用ウインパーに大男をまじ  
えて六名入る。そのキュウクツさ。

一二月三〇日 (雪) 零下一五度

C(八、一五)―大遠見(一〇、二五)―西遠見(一五、三〇)C  
今日も雪。腰までのラッセル。トップになるとザックを置いてヒ  
ーだ。雪に視界はさえぎられ、ひよっと雪にうもれたテントを見つ  
けるのも楽しい。思わず、コンニチハ。敵方もこの雪の中を歩くこと  
もないだろうにとでもい、たげに吹き流しから顔をのぞかせて、コン  
ニチハ。大遠見をすぎたところでサポートの二人に励まされて別れる  
(一三、四〇)。胸まで没するに至り二人づつ、ペアになって空身でラ  
ッセル。視界ほとんどときかす西遠見手前の台地で暮宮。

一二月三一日 (風雪) 零下一五度  
C(九、〇〇)―白岳基部(一六、三〇)

テントからシュラフまでびしょびしょだ。雪の上でるのは首から  
上だけ。全員空身でラッセルの道つた。トップがバテるとセカンド  
にラッセルをゆずり身分のザックをとりにもどるというシステム。こ  
うなるとMも六期の無届け集会を取り締れない。F手近にあったHの  
ザックをかっついてきてHに「ブー」云われたりする。これぞ白馬最後  
の斜面と張り切るが凡はなはだ強く視界二米。前進困難と判断し適当  
なキャンプサイトへと引返す。やせた尾根上なので、フロックも思っ  
ろにはつめない。凍りついた内張りもほごせて張り終るころには凡も  
だいがおさまる。凍りついたシュラフを広げて一九五七年をとじる。

一九五八年一月元旦 (風雪後晴) 零下四度

C(八、三〇)―白岳小屋(一三、三〇)  
縦走前半最後の餅を口にする。雪は小降りになったがラッセルは  
一層つらい。トップになったが最後セカンドに誘導されながら進む以  
外ない。ピッケルで目より高い雪を削り落し胸で押し、みざで固め、  
足をのせ、スポットもぐり、また頭上はるかの雪をくずし……  
これが冬山の醍醐味だなんて負け惜しみをいう。暮宮地上の斜面を登  
り切るころ日がさしてきて眼前に白岳カールが現われ五竜、鹿島は  
もとより富士まで姿を現わす。「なんだ白岳はまだはるかじゃねえか。  
この分じゃ白岳は日暮れ頃だな。頼りになんねえな」とSすっかり信

用をなくす。快晴になるとたんにおちらの山こちらの山のテント村が活気づくのが見える。白岳から四、五人おりてくる。カールを前に十時半ごろ昼食をすませ日に照らされて急に重くなった雪に体当りでラッセル再開。後からのパーティ我々が二時間も要したところを十分とたないうちに追いついてくる。ラッセルを交代してくれる。ころ日が照ってくるといくらリッジ通しても雪崩がてそうで気味悪い。上からのパーティと下からの多人数のパーティのおかげで五竜東面の粉雪雪崩を観賞したりしているうちに思ったより早く白岳着。小屋につくとショバ争いだ。やっど一坪ほどかくとく。アンザイレンして五竜に向うパーティ、連絡に下るパーティ、きのうまでのさびしさにひきかえ全く夏山の如きにぎやかさだ。(肉谷 徹)

一月二日 (風雪) 零下九度

いよいよ今日は切戸までと、三時二十分起床。昨夜から腹の底まで響く風の音が気になる。八時になって風雪やまず、風速三十米位。視界五米、やむなく停滞。

一月三日 (風雪) 零下二〇度

停滞。昨日に引き続き小屋がガタガタ音を立て、小屋から一步外に出ると風上に向っては歩くのに困難を感じる。吹きつけられる雪は岩をなめる様に這っている。

一月四日 (快晴) 零下二〇度

白岳小屋(七、〇〇)―五竜岳(八、二五)―八、四〇―切戸小屋(一三、三〇)

切戸に行ける最後のチャンス。三時起床。風の音もびたりと止り頼んでもない天気。ヶ月夜です。と云う肉谷の蕪しそうな声に他のパーティもゴソゴソやり出す。小屋から五竜への登りは夏道が出ているが、黒部側から強い風を横から受ける。五竜の三角点往復十分。五竜の下りは夏道と別れて、黒部側に落ちてくる顕著な岩尾根と縦走路との向の雪のつまったルンゼを百米程下り夏道にトラバースする。すぐオ一岩峰群にかゝるが、切戸までの三つの岩峰群の内では最も悪い所。オ一岩峰群最後のピークで昼食。鹿島槍は大きい切戸までには数え切れないピークが並んでいる。しかし空は一点の雪もない青空。天気は急変しそうなもない。ここまで来た他のパーティが引き返す。所々夏道はずれなくてはならないが全部黒部側を行くので心配ない。オ二、オ三岩峰群を過ぎればあと二、三のピークを巻き切戸小屋の見える所に出る。小屋までのトラバースは不安定な雪が付いているので緊張する。小屋は誰かツクリスマス・デコレーションの家だと云ったが、その通り。最近人が入った林子なし。小屋の戸とガラス窓が完全でないで、かなり中に雪が入っていたが、除雪して床の上にテントを張る。立派な白岳小屋には比べられないが四張位なら充分張れる。

一月五日 (風雪) 零下一五度

停滞

昨日一日もった好天も二日望むのは無理。割れたガラス窓からヒューヒュー雪が吹き込み小屋の前の岩壁に掛けられた釣金がつなっている。九日昼までの食糧を確保すべく今晚より喰い延し対策をとり今までのほぼ半分の量に減らす。石油一ガロン半、ローソク四本、メタハケ。燃料は十分あるが燃料節約のため明るい内からシラフはもぐる。

一月六日 (風雪) 零下一五度

風雪は増々激しく、小屋の中のテントも真白、本隊は命に上った。さうか。心は爺に飛ぶが、小屋から一步も出られない。ラジオ故障、食糧不足、この弱味につけこんで強盗不ズミに襲われ、貴重な乾パン、スーパの素など盗まれた。今晚から乾パンをだいて喰うことにする。

一月七日 (吹雪) 零下一五度

全くあきれる程よく吹く。愈々我々も最後に追いつめられた。明日行動出来ないし連絡上戻らねばならない。四人何もやる事がなくなる。トランプもおぎ、歌は腹がへる。無理に横になるが睡眠過剰で眼れない。明日はきつと本隊に会えると自己満足するしか手が無い。

一月八日 (快晴) 零下一〇度

出発(七、〇〇)ーキレット(七、五〇)ー八、五〇(一釣尾根)  
一〇、二〇(一)ー一一、〇〇(一南峰)ー一二、四〇(一)ー一三、一五(一)

CII(一五、一〇)

三日間同じ様な調子で吹いた風も昨夜十時頃から息をつき始めた。午前三時目を覚すと外は物音一つしない。しめたとはかり外に飛び出ると雪の切れ間に星が見え、月が明るく、雪を融かす時間もおしい様な気持。五電と云い切戸と云い天気には全くついていて。今日は本隊にきつと会えると、昨日までの雑炊を止め、量は少ないが固い飯を作り今日一日に備える。小屋を出たのは七時。小屋の前の鎖場から切戸までの間がこの縦走路中最悪の所。特に巽部側のトラバースは緊張させられる。切戸は五、六米下の段より這松の根をピンにアアザイレン十米、ザックを吊下し全員ホツとする。南峰のケルンは増々大きく、人間を探すが雪煙が上るのみ。北峰寄りの釣尾根に飛び出れば爺は遙かに遠い。南峰の登りは意外に短かく、南峰に達して冷側を見下すすぐ足元に本隊の姿。福田、関谷がころがる様に下って行く。

(町田)

本隊(オニ、三隊)

一二月三〇日 サポート隊 (風雪)

引返し地点(一三、二〇)ー一四、〇〇(一真宮地)一五、〇〇(一五、三〇)ー一六、三〇(一)

どこからどこ迄が大遠見だと云うのすら分らぬま、に縦走隊を送り出してペシヤンコのキスリングだけとなった我々は、さきほどまでのアルバイトに、くらべると何と小さな事である。



「頑張りよなありあり」あったけの声で最後のコールを送る頃、強い風雪がほとんど彼等の姿を消してしまっていた。

分ちあったラッセルも荒れ狂う西風に消されて思う様な下降が続かない。昨日の暮営地を整理し終ると急ぎ足で小遠見のゆるやかな登りにかゝった。雪にうずもれ、雪に泣き力強い叫びに応えて血気盛んなバレーイが登ってゆく。神城までと思っていたが、風雪に冬の午後沈着はなほぞしく、四時三十分遠見小屋に今日の宿を求めたのだった。

一二月三一日 サポート隊移動 (曇後晴)

遠見小屋(八、二〇)―神城駅(一〇、一五)―一ニ、二〇)―大

町(一三、一〇)―一四、五〇) オートバイ 源汲荒井家(一五、三〇)

―偵察行(一五、四〇)―一八、〇〇)

風雪こそおさまっていたが何かふさぎ勝ちな朝である。バリバリに凍った天幕に寝ている連中を思うと、又贅沢な朝でもある。一昨日とは違った尾根径を真直ぐ神城スキー場の上に飛びだすコースである。ツアー用の赤い旗に導かれてぐんぐん下る。かなりのラッセルであったが、急降の為か足が速い。神城駅には時間を合わせて到着したのだが、大雪の為、列車が実に二時間延着し大町入りが意外に遅れてしまった。先着の山口と早速自動車を手配し、燃料、スキー等を積みオートバイにゆられて源汲に向う。いよいよ才二のサポートが始まったのである。

偵察行の主眼は白沢天狗山への最短ルートを見つける事である。地

図による判断から天狗山北側に通ずる旧道(地図に点線有り)を予定して行ったが、地元の話しによると、皆無に等しい瘠道と化し、しかも昨今ヤブがひどいとこの事であった。約一時間取付点を当ってみたが雪が少ない為か(約六〇cm)想像以上のヤブであった。結局、源汲南方約二kmに麓を登り麓川と鹿島川を分ける長い尾根は現在でも、地元の人々の通路として利用されていると云う事で決定した。取付点としては、比較的容易なコウノミ沢(音読)を才一候補地として送るのである。

ミンカの夜がやってきた。道がカチンカチンに凍ってしまった。最終バスが訪れ、東稜先発隊が到着し、こゝに荷上げの体勢はとゞおりになく完成したのである。

一月一日 先発隊 (晴後曇)

BH出発(七、二〇)―鉢山小屋(八、三〇)―八、五〇)―コル(

(一一、一〇)―一一、五〇)―一九〇〇mテポ点(一四、五〇)―

一五、〇〇)―無名尾根下降点(一六、〇〇)―コウノミ沢(一七、

二〇)―源汲荒井家(一八、〇五)

初日の出を期しての出発だ。源汲部落の西側を巻く椋にしてコウノミ沢に入ってゆく。田中奥と山口と鈴木洞は先導隊としてや、軽荷で先を急ぐ。赤布をつけてゆくが、やがて広い道に出、コウノミ沢に沿って続いている。道は沢の中に消え河原歩きとなる。積雪は四〇〜五〇cmでラッセルと云うほどでもない。鉢山小屋を通ぎると、沢が狭

くなり小滝が続いて現われた。容易ではあるが今後の通路として考え  
ると無難とは云えない。コルはすぐ上ではあったが沢を離れてみた。  
だがうまくない。荷上げの連中を待って忠興に沢を登った。コルで昼  
食をとる。尾根は最初踏跡がみられたが、シヤクナゲが密着し非常に  
はかどらない。天候は全く元日にふさわしい小春日和とでも云いた  
い陽である。遠く針の木の稜線が真白に輝き我々をひきつける。荷の大  
きい荷上げ隊と声もとっかぬ程高れてしまった。一九〇〇mをテポ点  
とし、一九六〇mから発する無名最短尾根を降路にとった。ものすべ  
いブッシュをくぐり抜けながら山口の好判断でコウノシ沢に飛出した  
時は全くほっとした。天狗山を越す事は出来なかったが一応見通しの  
きいたこのコースに明日から十数名がきわ立った組織力を発揮するだ  
ろうと思つと、それはそれは痛快な思ひだった。(田中 興)

一月三日 (風雪) 零下八度

大町(七、〇〇)―源汲(七、三〇)―九、〇〇―コル(一一、  
四五)―一二、三〇―CIA(一四、五〇)

激しい灰色の降雪じぎりの源汲は静まりかえっている。だが荒井氏  
宅だけが後発六名を迎えてパッキングにあわただしい。総勢一ニ名、  
荒井氏宅を出たのは九時。雪が少い為、立てかけられたスキーが一列  
になって見送ってくれた。先発隊のトレールは消えていたが、コウノ  
シ沢左股をつめて不利な殆んど東尾根末端にルートを取った。コルで  
昼食を攝る。箆川より吹き上げる風雪は森林帯ですら、轟々と吹き抜

け、そして雪を流す。汽車の疲労、その上石橋花のブッシュに横ま  
れ、先発隊の物資デポ(一七〇〇米)に着いたが既に三時であった。  
白沢天狗も近いと思うが、此処をCIAとしてやっと二張の天幕を設  
ける。テント一張りを節約したので窮屈の上ない。

一月三日 (風雪) 零下二度

CIA(七、三〇)―CIB(一一、〇〇)―一三、三〇―CII  
A(一四、三〇)―一五、〇〇―CIB(一九、三〇)

風雪は未だ森林の中を吹き抜けている。CIAを出来るだけ上部に  
設け八名で二往復荷上を行い、田中将、山口、小田、米野の四名が先  
行ラッセルしつ、出来ればCIIまでのルート工作を行うこととする。  
先づ工作隊四名が七時整装で先行する。CIBより急激に雪は深くな  
り頭上の粉雪と斗うこととなり進度はぐっと遅くなる。ラッセル車は  
一時間を空すして貨車に追いつかれてしまった。白沢天狗直下より激  
しい風雪を受け視界は極端に悪く雪疝すら見分けが出来なくなったの  
で白沢天狗(二二〇〇米)を越えた約一〇米下方稜上に、無理とは知  
りつ、CIBを建設する。此処より約四〇米のギャップがあつて約五  
〇米の岩峰が風雪の中に直立している。昼食後先発隊に安藤が加わり  
ルート工作を行うこととする。七名でCIAの荷を上げて貰うこと、  
して、コルまで一気に下る。風が強く、出したザイルは瞬時にゴワゴ  
ワになってしまった。正面は垂直であり右は雪疝を伴つて深雪の急斜  
面である。左側は露岩が更に下まで切れている。田中トップでアンザ

イレンして竜川側のスノーバンドに取りついて見たが、ビート状の雪の下はスラブとなって居て、ルートとしては適さず一ピッチでコルにもどる。この向顔面に凍傷を受けた者もあつた程、風は厳しかった。安藤、田中で冷徹の雪泥を切り岩峰のコンタクトラインに沿ってザイル三〇米をフィックスし、岩峰上より続くナイフリッチをさけて、更にその上部までトラバースするルートを作る。此処が最も雪が深かった。この上は、森林のついたやせた尾根となり更に一つのギャンプが望まれたが、あとは容易なので引き返す。風は強いが雪はいつしか止み、月が中天に昇った。足下に大町の灯が大きい。その中をボッカ隊が登って来る。天幕増設が終つたのは、もう九時近かつたか。皆、今日のラッセルに疲れている。

一月四日 (快晴) 零下一四度

CI B (八、四五) - C II (一四、三〇) - C I B (一七、一〇) 明くれば快晴、肌を刺す様な寒気の中へ星が一つ二つと消えて行つた。C I より見上げる爺岳は、遙かに高く大きい。殊に天幕場で出発は手向取り八時四五分となつた。下山する山口と鈴木洞の二名に送られてギャンプに下る。フィックスの箇所にも雪も安定して難なく通知する。石楠花の生えたりツチを、木をぬってラッセルを続ける。オニのコルの登りは草付の急斜面にビート状の雪が付着している為、三〇米一本を固定する。この上からは、深いラッセルとなり、ラッセルにつぐラッセル。頂上の平坦なピークで尾根左に直角に曲つた。深雪の為

C II は爺岳直下にすら上げ得そうにない。三三〇附近は完全に体が埋まるラッセルに横まされる。東稜ジャンクションより更に一段下の肩に着いたのが一四時三〇分であつた。三隊はとても爺岳頂上まで無理なのでC II を此処と決し、折から降り出した雪の中を下って行く。三隊は勤めの都合上明日C I B より下山する。C II には二隊の五名のみとなる。爺は未だ遠く、風雪の中につすれて行く。

一月五日 (風雪後晴) 零下一四度

C II (七、五〇) - 爺岳 (一一、四〇) - 一三、〇五 - C II (一四、四〇)

C II を爺岳まで上げ得なかつたので縦走隊には頂上まで物資を上げて補給せねばならなくなつた。C I B の安藤、田中実、松田、成瀬、米野は下山。C II の五名は兎に角爺岳に向う。森林隊の尾根は、空洞と巨大な雪庇を有して居り視界を限られた我々はルートを迷ふのに苦勞する。あの大きな飯塚の体でさえスッポリと落ちると姿が見えなくなる様な、空洞だ。それでも森林限界から出るとアイゼンも利いた。ジャンクションで小憩、ワカンデボ。横なぐりの風雪のため、じっとして居れず、すぐ登り出す。頂上まで、ゆるい雪稜がつづいた。キックステップで頂上に立つ。黒部側からの激しい風雪に、あわて、雪庇の下をけずってツェルトをかぶる。順調に縦走を続けて居れば、もう爺に着いていそいなものと思つた希望もはかなく破れた。不安な気持ちをまぎらわせる紫煙が、ツェルトの中で息つく。しかしツェルトから

顔を出した瞬間、蓮華、針ノ木岳がスクリーンいっぱいにとびこんで来た。槍、富士さえ見える。頂上に立てた標識の色があまりにも鮮かに過ぎて見えた。しかし鹿島方面は流雲に、遂に見る事は出来なかつた。縦走隊が、はたして我々のCⅡを見出せるだろうか。重い足でCⅡへと下る。又しても灰色の雪がちらつき始めた。

一月六日 (風雪) 零下九度

今日は鹿島槍までと四時起床するも、風雪の叫びのみ。終日荒れる。シューペットを喰い、町田作詩とか云う歌を唱い、誰かの妻ノ口を聞き、六日が暮れて行く。

一月七日 (風雪) 零下七度

CⅡ(七、三〇)ー引返点(一ニ、〇五)ーCⅡ(一三、一〇) 縦走隊は食料、燃料ともあと一日分しかない苦である。風雪は昨日にも増して激しいが、何としても気になるので煮を決して出発する。トレールは全くなく、一昨日よりもひどいラッセルを繰返す。森林限界を出ると風雪の為に視界は全く阻ぎられる。頂上への最後の登りに半雪洞を掘り待候して見たもの、風は少しもおさまらず一層激しくツェルトをたゞいた。二人を待たせ、田中、笹田、小田で冷まで行かんと再び風雪の中へ飛び込んで行ったが、身体は烈風で飛ばされそうになる上雪庇を見分けることが困難な為、頂上直下よりついに引返すことにする。飯塚、京田を伴いCⅡへと風雪の中を馳せ下った。縦走

隊のことが心配で、誰も口を聞く者もなく、ひっそりとした夕食が済んでシュラフにもぐっても皆仲々寝付けない様子だった。風は間断なく天幕をおおりつゞけていた。

一月八日 (快晴) 零下七度

CⅡ(七、五〇)ー爺岳(九、三〇)ー冷池小屋(二〇、三〇)ー一、〇〇)ー鹿島槍ヶ岳(一ニ、〇〇)ー一ニ、二〇)ー冷池小屋(一ニ、五〇)ー一三、一〇)ー爺岳(一四、三〇)ーCⅡ(一五、一〇)

今日縦走隊に会えなければ縦走は才一段階に於てすら失敗なのである。気遣りなのでピッチが自然に上る。昨日までの荒れはどこへやら日本一の青空だ。爺岳まで一時間四〇分。黒部側の夏路のヴァイントクラストをバリバリ蹴破って冷池小屋へ。縦走隊が着いていないかと小屋内を除いてみたが戸は釘着けされて、ひっそりと静まり返っている。昼のカンパンを喰りながら、奴等の事だから、今頃鹿島の登りだよと意見一致。さればとて鹿島槍へ又とばしにとばす。布引の登りも一息に越えて南峰への登りにかゝると上から「オダール」という声。まさしくゴボウとキツネ。見上げると林も、町田先輩も皆元気にかけ下って来る。オーバー手袋をぬいで堅い握手。福田の無精ヒゲが印象的だった。雪面の反射が目にしみる。頂上に返って、それぞれの話に爆笑が断えない。CⅡが爺より大分下方であることから補給するのに一日無事せねばならぬ事、及び半数以上が、あと二日の休暇しかない為、縦

# 行動表

源 派	C I A	C I B	C II	爺 岳	摩 島 槍	切 戸	五 竜	白 岳	西 遠 見	大 遠 見	小 遠 見	神 城
12/29 風雪											← 1 ← 1 S	
30											← 1 ← 1 S	
31	← 3								← 1			
1/1 晴	← 3								← 1			
2 風雪	← 2 ← 3								停			
3	← 2 ← 3				fix 30m (田中将, 山口, 米野, 小田)				停			
4 晴	山口 森林	← 2 ← 3			fix 30m				← 1			
5 風雪		← 3	← 2						停			
6			停						停			
7			← 2						停			
8 晴			← 2									
9 高曇			← 1.2									

1 隊 町田, 林武, 福田, 関谷

2 隊 田中将, 笹田, 小田, 飯塚, 京田

3 隊 安藤, 田中興, 山口, 米野, 松田朝, 成瀬, 鈴木潤

サポート隊 田中興, 鈴木潤

走の沖二段を中止し爺岳より下ることにする。C IIへの下りは、天候に恵まれず縦走前半のみで帰るとは云え、何か花び満ち足りたものを持って帰る方が足どりも軽い。長距離ラッシュのためバテ気味のものもいたが、その夜C IIでは、食糧をネヅミに強奪されて欠食している縦走隊の為に、ありとある食糧が並べられ、全部のローソクに灯がともり、スベアは快調なウナリをあげた。明日は下山だ。欲を云えばあと三日の日数が欲しいのだが。無数の星は満天に降り最後の夜を飾ってくれた。

一月九日 (高曇) 零下一〇度

C II 撤収 (八、三〇) - C I B (一〇、五〇) - 一三、〇〇 (一撤収) (一三、四〇) - 荒井氏宅 (一四、五〇)

撤収ともなると気は大きい。余った食料、燃料に火をつけ、必要品だけザックにたっま込む。笹田、小田がラッシュの海先行する。田中、町田でフィックス撤収。C I Bで全員集結。C I Bを撤収。不用物を燃す煙が雪庇に沿って流れて行く。「永き世紀の中禁の……我等が都立西高校」低いバスが、何のためらいもなく爺岳の一角に流れる。青臈をたらし中学生の山岳部が奥多摩に芽生えてより十三年目、一歩々々の山登りに貧しいが生長の花びがある。今針ノ木迄の縦走を打切ったとは云え、満ちたりた胸で里へ

器具表

品名	数量	C I	C II	縦走	備考
冬用{ミッドウインター} 天幕	4	No. B.11	No.10	No.5	
ツェルト	1		No.9		
マットス(ヘアロップ)	19	9	6	4	
石油コンロ	6	スベア中 ポリマス	スベア大 杉本	スベア大	(附用品 を含む)
スコップ	3	1	1	1	
ザイル 30m	4	2	1	1	本ス ス(CI- CII)
〃 40m	1	1			
〃 補助	1			1	
カラビナ	12		8	4	
ハーケン	24		16	8	
ハンマー	3	1	1	1	
炊事用具	4組	2	1	1	
気温計	3	1	1	1	
石油	14gal	4(0.5)	6(3)	4(0.5)	( )内 残量
ローソク	50	20	20	10	
メタ		4	5	5	

会計報告		
参加費	28,700	
寄附金	3,100	
計	31,800	
内訳:-		
	予算	支出
食糧費	20,700	20,300
燃料費	3,200	2,750
器具費	3,200	2,090
医薬費	1,600	1,600
庶務費		4,535
	( 荒井家御礼 菓子折 オートバイ 山口宿泊 雑費 )	3,000 300 800 250 185
合計		31,275
残額		525

と下って行く。バスまでの時間を荒井氏の御馳走を受ける。口登高会が遭難したと初めて聞く。笹田は奥さんの待つ細野へ。野郎共は浦島を山辺温泉へ。  
( 田中興、小田、田中将 )

後記

今回の冬山で初めて日数が欲しいと思った。せめて廿日間の休暇のとれる中堅会員が十名居ればと残念に思った。我々は未だくやれる。廿日間あれば裕に白馬から針木まで縦走出来る力を持って居る。それだけに学生会員の奮発を来年度に望もう。これが残念なオ一。廿日間と云わずともあと一日余分にあれば、針ノ木を廻れた筈だ。

結果論に終るが、あれ程準備会で指道した本隊のルートを、先発隊の感遠いから、森林の尾根の末端から取りついた事である。ゆるい長大な尾根は労多くして功少しなのだ。雪崩の危険がないかぎり最も有利なルートを選択することも技術の一つである。休暇が短かければ短かい程、一考の余地がある。技術とは岩登りのみにあるのではない。時に応じた判断力が重要なのである。未熟の一言につきる。縦走する力を持っていながら、C IIを傘へ上げ得なかったこと、オ三隊が翁岳登頂出来なかった事の一因はこれだ。これがオニの残念である。しかし我々は、この冬数パーティが五竜、鹿島槍縦走を試みて天候の為成し得なかった縦走を我々だけが通過した一争を以って、小さな満足をしている。一人々々皆よくやってくれた。来冬は少し休暇を無駄なく九一杯登ろうと思う。山は登るためにあるのだから。  
( 田中将 )

# 61 八ヶ岳天狗尾根

係 田 中 実

期 日 九月二日〜三日

参加者 田中 実、鈴木輝夫、林 春彦

九月二日 (曇)

清里(八、四五)〜九、一五)―清泉寮(九、四五)〜九、五五)  
 川保川東沢(一〇、二五)〜一〇、四五)―赤岳沢出合(一一、二〇)〜一三、一五)―天狗尾根(一四、一〇)〜一四、三〇)―縦走路(一八、二五)―赤岳(一九、三五)

駅で簡単な朝食をすませて、初秋の高原を赤岳目指して出発する。遙か前方に立ちはだかる川保川東沢の奥壁は暗雲がたれこの望むべくもない。二三のパーティと相前後して川保川へ入る。沢に入り二・三の岩小屋を後にすれば流れは大きく右折して正面から赤岳沢がさ、やかに合流する。赤岳沢を遡行すること小半時ばかりで右岸から小さな窪みが入って来る。我々は此の窪みを直登して天狗尾根に取付いた。尾根に出て二、三のピークを越えてニードル状の小尖塔の前に達し、此処で一息入れて大天狗の岩峯に取付いた。P・1は天狗沢側のバンドを伝ってクラックを乗り越し、基部から赤岳沢側を巻く。P・2も赤岳沢側をはい松に足を取られながら巻いて通過する。秋の日は早や西空へ傾いているのに更に予期せざるP・3が正面に現われた。此れが所謂大天狗であるのか。P・1と共に天狗沢側は小規模ながら急傾斜

で切れ込んでいて適当な岩場を提供してくれる。赤岳沢側を巻いて更にP・4の天狗沢側を巻く頃には日もとっぷりと暮れて目指す赤岳のあたりはマミの中に融け込んでしまった。竜頭峯は尾根通しに切南きを通過して縦走路へ出る。空腹を押えながら他の登山客と共に暗黒の赤岳頂上へ立った。頂上石室は満員の盛況である。早速ツェルトにもぐり込んで啗った梨のうまさ―夜明けの寒さを覚悟しながら三人は深い眠りに落ちて行った。

九月三日 (雨後曇)

赤岳(七、一〇)―中岳コル(七、四五)―阿弥陀岳(八、一〇)〜八、二〇)―不動清水(九、一〇)―八ヶ岳農場(一一、三〇)

頭上を行き交う足音に目をさます。時計は六時を一寸まわったところである。山頂はガスにつままれて御来光を望むことも出来ない。せつかく沸かした湯をひっくりかえされて石室へお茶の交渉に行く。小屋の中は客がひしめき合っていて、落着いて食事をとる場所もない。食事の終る頃ガスは大粒になり雨に変わる気配を示して来た。濡れた岩稜を下るのは香しくないで御小屋尾根を下る事にした。中岳のコルへ下るあたりから完全に雨になって立場側から吹きつけて来る。阿弥陀岳の頂上で昨年の集中をしのいだのも束の間、もったいないが御小屋尾根への下山を開始した。御小屋尾根は阿弥陀岳西の肩から柳川南沢寄りに下りさえすれば後は唯急勾配を下るだけで短時間に高度をかせぐ事が出来る。小一時間も下れば勾配もゆるくなり左右に入ヶ岳の

裾野を眺めながらのんびりと歩く事が出来る。やがて尾根が回りの裾野に溶け込む頃に農場に着く。後はバスで茅野まで出て此処で偶然に北八ヶ岳に行った現役に会い珍らしく真昼の汽車で帰途についた。

(林 春彦)

## 64 谷川岳縦走

参加者・福田宏二郎、中山 博、坂田幸彦

十一月九日 (雪)

土合に降り立つと、かなり強い雨である。上では雪だるうと気にしながら朝食・西黒尾根の登りにかゝると、早くも雪に変わった。雪の方がまだ始末がいゝが、足元は大いに滑って流る。ピッチがやけに遅いので、ザックの重量を加減してピッチを上げるべく努める。森林帯の中は風当りも弱く、濡れた体にもさほど寒さを感じない。森林限界を過ぎると風も強く体感温度はぐっと下る。ガレ沢の鞍部の積雪小屋前にて幕営。飲用水も心配なく新雪から取れる。

十一月一日 (晴)

今日は昨日の分も稼がなくてはならない。ハッパを掛けながら肩に出る。小休止の後、万太郎に向う。オジカ沢の頭の長ったらしい稜線には少々嫌気をもよおす。しかしこの部分はこの縦走路中最悪の箇所である。こゝを通過しておけば、後は暗くなっても心配ないと、ピッ

チを落して慎重に通過。大障子から見ると万太郎の山容は雄大だ。万太郎の登りでだいぶ疲れ、頂上では口もきけない始末。頂上直下で幕営と決める。今日も予定の毛渡沢乗越小屋まで行くことが出来なかった。昨日から調子の悪いプリムスも修理して使用することが出来、スキヤキで明日の英気を貯える。

十一月十一日

昨夜の栄養補給で全員元気。大黒の登りで意外に時をくう。仙の倉で遙かに大源太を望み、ゆっくりもしていられぬ。平標、大源太いざれも山腹を捲き、最終バスに乗るべく法師に急ぐ。しかし気があせるだけで歩調が合わない。怒鳴りつゞけて、真暗な法師温泉に着いたがバスはなく、やむなく山の温泉に一泊。久し振りに静かな山の湯を味わうことが出来た。

(福田)

(13)

## 65 稲子岳南壁

係・鈴木 潤

参加者・田中 興、松田朝夫、鈴木 潤

稲子岳は北八ヶ岳中山峰東北に一五〇米、二〇〇米の崩壊性岩壁を有する山である。岩登りのゲレンデとして使用に耐えるものかいなか、資料少なきまま、試登を行った。部分的に知り得ただけだから全ルートに同じ尚研究を要するが岩はもろく浮石多くゲレンデとしての対象としては向かないと考える。



一月二三日 (晴)

松原湖(一〇、二五)―稲子湯(一二、三〇)―緑池(一五、二五)  
―黒百合平(一七、一〇)

松原湖下車。あてにしていたバスが、工事の爲運転中止と聞き多くの登山者と共に歩き出した。快晴の陽指しは晩秋だと云うのに無性に鬱く、遠く天狗、硫黄と並んで切り落された食パンの様な稲子岳の壁が地平に見える。稲子湯から道は山らしくなり落葉松或いは米栴の森を行く。樹林の中にポツカリ口を南けた緑池は結氷していて、その梢越しに稲子岳のバットレスがぐっと迫っていた。明日のアプローチを考えて今日中に中山峠の黒百合平まで天幕をあげることにする。中途で秋の陽は落ちかゝり雪原とよっている黒百合平に着いた時は真暗であつた。

一月二四日 (快晴)

黒百合平(六、〇五)―チムニー取付点(六、五五)この間チムニー  
試登九、一五)―左フェース取付(一〇、一五)―頂上(一一、四〇)  
(一三、〇〇)―にゆう(一三、〇〇)―黒百合平(一三、四〇)  
一四、二〇)―波湯(一五、三五)―バス(一五、四〇)

中山峠より東は雪海の中だ。昨日登った道を下りバットレス基部に取りつこうと森林帯に入る。苔の多いブッシュの中を倒木を越えつゝ、行くと基部のガレに出る。これを直上して中央カントと左カントの中央に喰込む最も顕著なルンゼを目指しモレーヌ状のガレをトラバース

する。途中張り出した左側のフェースにハーケンを発見抜いて見たが真新しい。一ピッチ目はチムニーでフリクションで通過。二ピッチ目はハングしているので右にトラバースしてから乗り越す。この時トップの足下の巨大な岩が崩壊寸前であることを発見、ルートをとられるその上たえず岩が削がれ落下し続ける為、ミノルさんは中止を指示、トップ鈴木はかろうじてハーケンを打ちアアザイレンで下降する。時計とにらめっこして、再びガレを左にトラバースし、左フェースにルートを求める。下部は岩であるが上部は草付状で、泥の中に指をつ、こんでホールドにする。昼少し前に稜線に出て頂上の広い砂礫台地で食事を攝る。「にゆう」へは裏手の森林にとびこみ、猛烈なヤブこきの後、やっと縦走路に顔を出す。遠くまで八ッ岳の裾野が広がって白樺が美しい。三時半のバスをつかまえる為三五分で天幕までぐっとばし徴収する。波湯まで落葉の森林は快適であつた。

「附記」

三年程前、妹達と米野と緑池に遊んだ際、稲子岳の中央壁のスラヴ状の岩と鋭いエギイユに魅力を感じた。それ以来北八ッ岳に入る機会もないまゝに、スケッチを主体に名称を与えていたが、編集を前に「岳人」一ニ一号(五月号)に拙撰登高会が発表したので、混乱をさける為、本文の名称は全部拙撰の与えた名称を用いさせてもらった。

(田中 将利)

(鈴木 洵)

67 広河原奥壁ニルンゼ

三一年四月、同一一月、三二年三月と過去三回、延べ四パーティーを広河原奥壁ニルンゼに送り込んだ我々は本年三月四回目にして初めて成功することが出来た。失敗の回を重ねる毎に奥壁の複雑な地形も次々に明瞭となり、今回は全員、成功の自信をもち、向うことが出来た。又敢て雪中ビヴァークをし、今年こそは、と云う意欲に燃えてアタックした。

参加者・町田 明、福田宏二郎、関谷 敏、鈴木 潤

三月九日 (快晴)

立沢公園(一三、三五)ー広河原沢分岐点(一五、二〇)ービヴァーク・サイト(一八、〇〇)

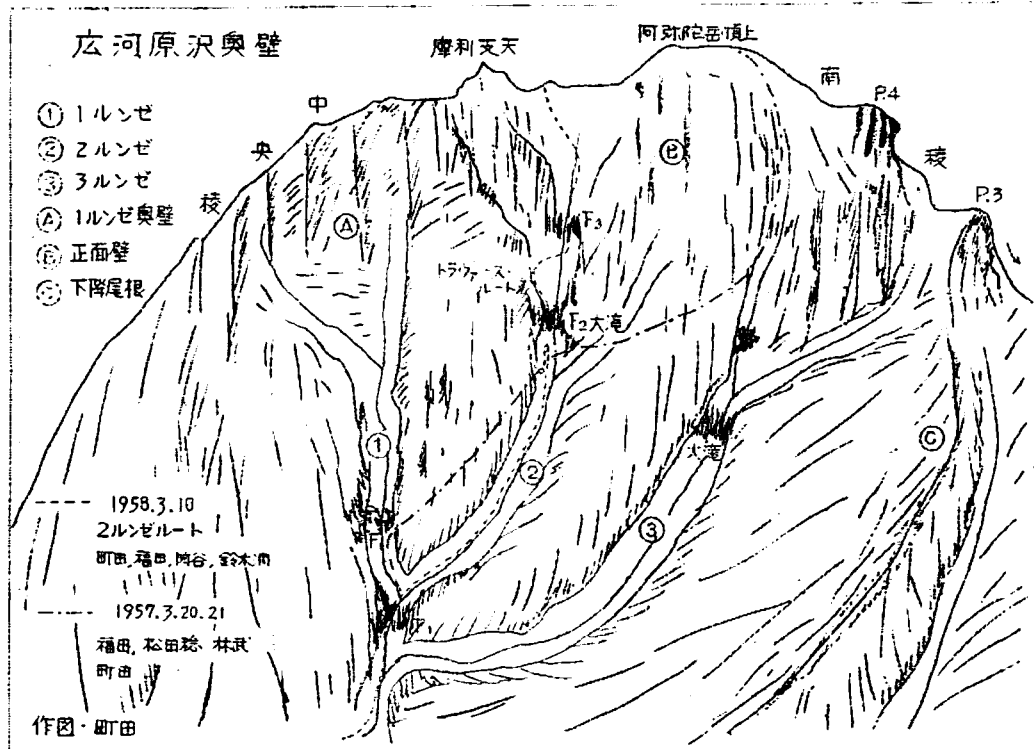
明日のアタックに備え、今日中に出来るだけ奥に入っておきたいが、代採小屋附近より急に積雪が多くなり、膝上位のラッセルを強いられピッチが上らない。ワカンがあれば時間が稼げるのだがなあー、と持っていてこなかったのがやまれる。ニ股で左股を分け、直前に右に折れ、向もなく毎年キンブ・サイトとなる場所を過ぎる。しかし日は既に没し森林の中は一層暗く、せめて若小屋までと思っただが諦め、大木の根本をビヴァーク・サイトに決める。無風、体も濡れてないので余り寒く感じない。しかし初めての雪中ビヴァーク、衣類を全部着こみッエ

ルトをかぶる。ガソリン・コンロを使用した。温度の調節が出来ないので苦勞したが、お蔭で温い物を食うことが出来た。四人詰ったツェルトの中は、人間が重なり合い、重くて眠るどころではなく、夜明けを待った。

三月十日 (無風快晴)

出発(五、〇〇)ーニルンゼ出合(七、三〇)ーF<sub>1</sub>(七、四〇)ーニルンゼF<sub>2</sub>(九、〇〇)ーコル(一三、〇〇)ー阿彌陀頂上(一三、一五)ー一四、〇〇)ー南稜三峯ービヴァーク・サイト(一六、〇〇)ー富士見(二〇、二〇)

ツェルトから顔を出すと、真黒な南稜の上に、研いだような月、満天の星。気温は相当低い。アイゼンが素手に吸い付く。懐電片手のラッセルは膝位。通いなれた道だが、ニルンゼ出合までは長い。途中十米位の滝が四つ位ある筈だが全部雪にうまっていて、急な斜面になっているので分る程度。ニルンゼ出合は狭く左岸より合う。こゝまでくると周りも明るくなり、正面にニルンゼF<sub>1</sub>の急な雪の斜面が見える。この滝の上でV字型にニルンゼが左から、ニルンゼが右から合う。この滝は二十米以上あるもので兩岸が垂直な岩壁であるので無雪期には相当悪い所で奥壁最初の難関になるだろう。滝上で右ニルンゼに入り、左岸から合う奥壁ルンゼ出合まで、直線的な雪の斜面が二百米位続く。奥壁ルンゼの出合は非常に貧弱で、うっかりすると見落してしまふ。この奥に広河原奥壁の最悪の壁がある。向もなく阿彌のF<sub>2</sub>が目の前に



立ちふさがる。三分の二はうまっているが十米位はある。今まで続べ  
てこの滝でつまり右に逃げ三ルンゼに入ってしまっているのである。  
正面はオーバーハングで、左岸に三本の浅いクラックがあるが、上部  
で滝の上にトラバースしなくてはならず、その部分が問題だ。やは  
り一番可能性のあるのは右岸の浅いクラックである。しかしホールド  
スタンスが少なく、その上、上部はハング気味。福田、町田とそれぞ  
れ試みたが、失敗に終り、巻くことにする。五十米位戻り一・ニルン  
ゼ中回リッヂにつき上げている雪のつまったルンゼを登り、はい松の  
あるリッヂに出る。リッヂ通しにはい松をわけて登ると、極度にやせ  
た岩稜となる。馬乗りになって三ピッチで一ルンゼからのトラバース  
スルートと一緒になる。ここで再びニルンゼに下りる、トラバース  
気味に下りるとニルンゼ二段の滝F<sub>3</sub>の下に出る。F<sub>2</sub>よりも規模は小さ  
いが、雪が少ない時はやはり問題となる滝である。福田・岡谷が滝の  
中央部、町田・鈴木が左岸寄りを登る。浮石も凍結しているので落石  
の心配はない。一ピッチで滝上に出る。F<sub>3</sub>上で傾斜も緩くなり氷のは  
った小滝を越せば扇状の最後の上りになる。真直に登って、摩利支天  
守りの稜線に出た。風もなく、空はあくまで青く、春の襟に暖かい。  
三年越しのニルンゼも成功した。四人そろって固い握手。四人とも過  
去に敗退の経験をもっているので統しさも一層である。阿弥陀頂上で  
一パーティーに会うが、何処から出て来たのか疑う様な目で見つめら  
れた。下るにはもったいない様な天気であるが、南稜を下降、皿峯よ  
り支稜に分れ、アイゼンにつく雪がダンゴになり苦戦して広河原沢に

下りる。三ルンゼ出合少し下から再び見上げ、こんどは一ルンゼだぞと秘かに自分に云いきかせながら、一ルンゼ奥壁の垂直な岩壁を眺める。帰路雪の無くなる伐採小屋まで重い雪に悩まされたが、久しぶりに満ち足りた気持で下山することが出来た。(町田 明)

## 68 北岳バットレス

参加者・林 武志、関谷 徹、鈴木 洵、飯塚康史、京田守弘、高

橋邦雄、中山 惇、坂田幸彦

三月二〇日 (晴)

芦安(八、五〇)―昼食(一一、一五)―夜叉神ト  
ンネル入口(一二、四五)―一三、一〇)―昼食(一五、〇五)―  
一五、一五)―鷹の住山(一五、三〇)―荒川小屋

〇〇商店自家用車に声をかけられたがお断りして旧道へ向う。こゝまでの歩きぶりからみて峠まで車にのっても今日中に池山に入るのは無理と判断、荒川泊りときめる。八貫ほどの荷だがグツとくる様子。旧道も傾斜を増すころには中山がたよりなくなってくる。二十分おきに力ゼにして後をまつ。トンネルをでればあととは下り坂のみと期待をかけるもこんどは高橋がよちよち歩き。やれやれと思いつながらも青空に浮く北岳に視線をよくする。気の進まない計画だったがバットレスが目にはいってくと自然斗志もわく。鷹の住の下りは残雪がありいさゝか悪い。ふらふらする高橋の荷をへらし落ちても命に關係ない所

まで関谷がアンザイレン。日没もせまり氷結がはじまるころアイゼン着用。アイゼンのない鈴木は全く気の毒な寒張ぶり。やっと懐帯なしで河原までたどりつきホツとする。河原づたいにデレデレと荒川小屋入り。本日の努力賞は坂田・正直にいうとあまりの弱さにあきれた。これに対しては昨夏の合宿で正会員が新人を甘やかしたことも責めらるべきだが新人は進んで自らの体力増強につとめる様にしてもらいたい。

三月二一日 (晴)

荒川小屋(六、四〇)―先発合流(八、一五)―八、三五)―池山小屋(一三、〇五)―一四、三〇)―ICS(一五、三〇)

現役についていた林、飯塚はボーンコン沢の頭のBCより下山、本隊を迎える。本隊は出発直後よりバラバラとなり、前後の差が大きくなる。雪は、急坂の最上部附近までないので夏山と変らない。中山、高橋が大きく遅れる。

途中で現役と会い東京への連絡を頼んで別れる。

急坂が終って捲道になると雪が適当にしまり快適に歩ける。池山から小屋迄意外に長いのでウンザリする。池は真白になってまぶしい。中山は約三十分遅れて到着。直ちに昼食にする。今日中にBC迄上ることは難しいので関谷と飯塚でBCに行き、明日バットレス偵察を行うこととし、他は幕営訓練のため小屋から一時間位登って幕営することにする。小屋到着迄よかった天気もあやしくなってきた。偵察隊、

本隊相次いで出発。既に立派なトレールがついているので非常に楽だ。急登も立派なステップがあるため重荷に対するつらさのみこたえる。細い核線へ出たところで真營する。や、風が出てきたが、森林帯の中であるので大したことはない。四十五分遅れて中山到着。速やかにテントも設営され、スベアもつなり出した。

偵察隊は空腹には勝てず、風の強い砂払いの頭で夕暮れのバットレスを眺めながら、スコップの上でシャーベットをつくる。BCにつくともうす暗くなったが、こわれたブロックをなおし、翌日にそなえ寝袋に入る。

三月二日 (晴)

オ五尾根 関谷、飯塚

○Ⅱ(六、〇〇)ー下降点(六、四五)ーオ五尾根最右端(七、二〇)ー七、四五)ー北岳(一〇、〇〇)ー一〇、四〇)ー○Ⅱ(一一、一五)

今日の目的はオ三尾根に取り付くまでのオ五、オ四尾根のトラバースルートを確認することだ。スベアを一台ずつか、オこんで飯塚はオシマ、関谷はモチ。無風快晴。偵察だけとはもったいない。オ五尾根も登ることを書き置きする。八本歯のコルをすぎ吊尾根の中が広くなる所から下降しオ五尾根に移る。ここからは昨夏事故でDガリーから逃げたルートを逆にたどりいゆる緩傾斜帯をたどる。オ五の最右後をトラバースしDガリー。ここでオ四のトラバースルートも確認でき

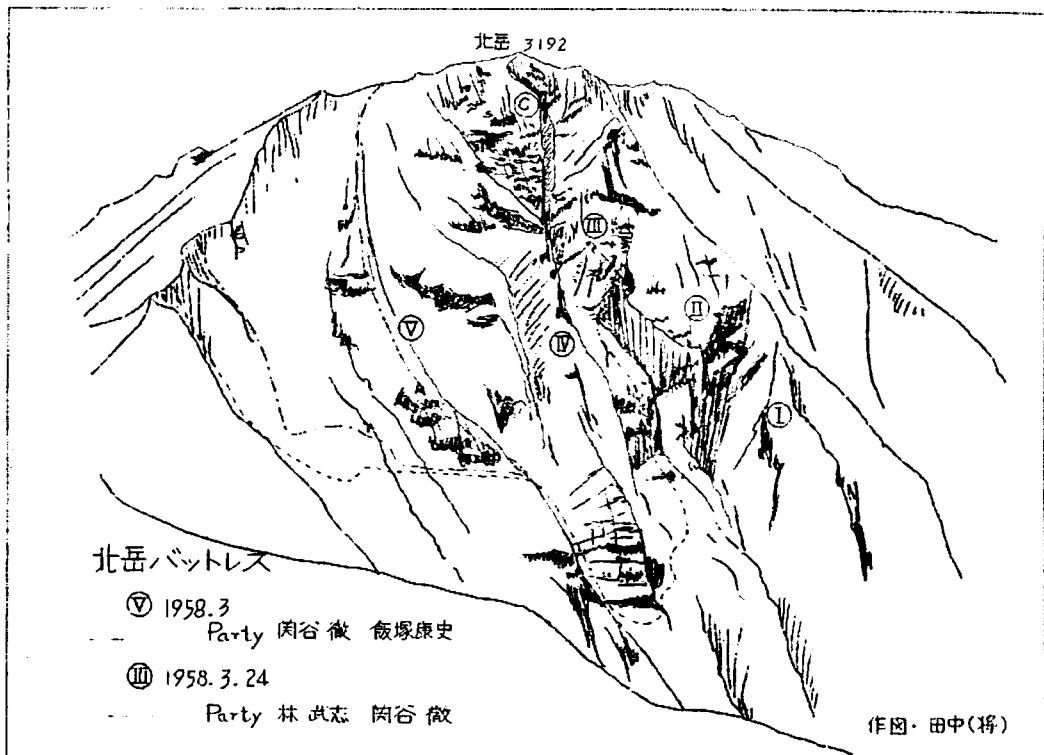
たのでオ五の登りにかゝる。ニピッチ岩稜を登ってみたがすぐ雪稜になってしまいザイルを解く。氷漬けのはいかに薄雪がかぶっていてヒヤヒヤする場面もあるが、この広い雪原の中だもん落ちたってどっかで止まるよとピッケルバンドをしめると気は強い。リッジ通しにルートを送るもオ才に傾斜を増し雪壁となる。どこまでいっても平らにならない。昼食は頭上までオアズケとしすぎ。腹はミルクでこまかす。キックしても一、二度じゃへこまない。足首ネンザスタイルでスタスタとやりがまんできなくなるとバケツを作って足首のカゼ。後を振り返ると馬力屋飯塚がボッコボッコとものすごいキックで登ってくる。風が強くなったと思うとすぐ裏道にでた。頂上まであと五分。オ五とはいえ何ともうれしい。飯塚もニコニコ、フワフワしながら頂上に行き、シュエルトをかかぶって昼食。オ三尾根上部を見物ののち心も軽く吊尾根を○Ⅱへ。

(関谷)

○Ⅰ隊 林、鈴木、京田、高橋、中山、坂田

○Ⅰ(七、〇〇)ー砂松ノ頭(九、一五)ー一〇、二〇)ー○Ⅱ(一三、四八)

心配された天気もどうやらもち、曇天無風で、テントの撤収も割合早く終わった。トレールはしっかりして全然もぐらさず歩き易いので、森林限界迄アイゼン無しで歩く。森林帯を出ると風が身体にこたえる。現役のつけたフィックスをはずし、砂松を登る。砂松で風に吹かれて昼食にする。バットレス偵察の関谷、飯塚が気づかわれる。しかしそ



月	日	天候	菅谷	C池 I山	C池 II	北岳	向岳	備考
3	16	晴	→					小田, 飯塚(現) 岡谷, 今井, 橋本, 中村, 高山, 森, 堀内, 川田 入山
3	17	曇	→	→				
3	18	曇	→	→	→			林武(現), 田中 入山
3	19	曇	→	→	→	→		小田(現) 今井, 橋本 登頂
3	20	晴	→	→	→	→		林(現) 田中, 岡谷, 中村 登頂 小田(現) 橋本 下山 岡谷, 鈴木, 京田, 高橋, 中山, 坂田 入山
3	21	晴	→	→	→			岡谷 飯塚, 林 鈴木以下5名
3	22	晴	→	→	→	→		才五尾根 岡谷・飯塚, 林以下6名
3	23	大雪	→	→	→	→		全員
3	24	快晴	→	→	→	→		才三尾根 林, 岡谷 北岳 鈴木以下5名
3	25	晴後曇	→	→	→	→	→	向岳, 林以下5名 下山 飯塚 休養 高橋
3	26	雨後曇	→	→	→	→		
3	27	晴	→	→	→	→		全員下山

の姿は見えない。こゝからアイゼンをつけ、雪は適宜に堅く快適に歩ける。南側からの風が強く時々雪が舞う。我々がCⅡに着くと向もなく、上から関谷、飯塚が降りてきた。CⅡは増設され、明日からの行動に備えられた。夕方より雪が降り始め、明日の登攀が気ずかわれる。

三月二三日 (凧雪)

BC(八、五〇)―北岳(一〇、二〇)―一三、三〇―BC(一三、四八)

三時起床。雪は降り続き、風も多少ある。しかし、好転の可能性があるので、予定通りサポート隊、アタック隊と相次いで出発。八本歯は風は強く、先発のサポート隊は、視界がきかないため、バットレスへのトラバース地点を間違え、時間を損失した。トラバース地点に達した頃雪は止んだが、風は強く、目を開けていられないので中止することにする。

CⅡで一服の後、全員で北岳往復に向う。八本歯は相変らず北風が強く、飛ばされそう。しかし、現役が通って以来、何人も通っている。トレールはしっかりして、無雪期より容易に通過できる。又思ったより雪は多く、ランセルを要する部分が多い。北岳南面は雪が余りないので、西面の雪面を登る。風も弱まり、空は晴れ、頂上の展望は快適だ。昼食後、関谷、林、鈴木で才三尾根上部の偵察を行い、上部は容易であることを確認して、頂上に戻り、全員夏道を下降。雪

はほとんどない。途中、アイゼンの練習をしてCⅡへ帰る。

風もほとんどなく、太陽は頭上に輝き、ポカポカして眠くなるようだ。明日は良い天気のようなので、充分栄養をつけ、やすむ。

三月二四日 (快晴)

アタック隊 林、関谷

CⅡ(五、三五)―八本歯(六、〇〇)―Dガリー(七、〇〇)―七、三〇―才三尾根取付(八、一〇)―北岳(一三、三〇)

サポート隊 鈴木、飯塚、京田、高橋、中山、坂田

CⅡ(四、四〇)―Dガリー(七、〇〇)―七、三〇―CⅡ(八、五〇)―一三、一〇―北岳(一三、一五)―一四、〇〇―BC(一四、四五)

朝起きて外へ出ると満天の星、しかも無風である。サポート隊、飯塚、鈴木、アタック隊、関谷、林、相ついで出発。サポート隊のランセルにより、アタック隊はピッチが上る。雪は表面非常に堅く、内部もしまり、安心して歩ける。Dガリー下降点でサポート隊と別れ、滝上を下る。こゝが一寸悪くアンサイレンする、才四尾根をトラバースして、Cガリーに入り、膝から腰位のランセルで才三尾根末端に取付く。這松の中をニピッチで、関谷がチムニーに入る。垂直に近く、肩巾よりやや狭く、鼻は雪がつまり蒸かなく、しかも中程にデョックストーンがあり、てこずる。トップの落す雪塊は体に当たると想像以上に痛

い。テントから声援が聞える。サックを残して何とか突破、上は這松のリップで、一ピッチで二人すわれる場所があり、昼食にする。CⅡでも昼食なのか人影は見えない。オニ尾根から雪や岩がガラガラ落ちる。

昼食後一ピッチで這松が終り、三種程雪の積った岩となり、五米で再び這松帯となり、一ピッチで土まじりの岩に出る。雪がとけて濡れ登り難い。更に一〇米で這松帯になり、雪面に出る。一ピッチで最後の難関と見られるルンゼに入る。ルンゼの上部は雪は氷化して悪く、右の岩に出る。這松と岩との向を登り、左のリップを登り這松帯の雪面へ出る。一ピッチでスノーリップチに出てホツとする。これから上は昨日の偵察で、ラッセルだけであることがわがっている。一服して最後のラッセルを行う。凧は出てきたが快晴だ。登攀を祝して手を握る。四十米のザイルは雪がついてサブに収まらず仕末が悪い。八本歯でサポート隊と会い、水筒一本の紅茶を一気に飲み干す。目的の一つが果たされたので、テントはさびで一杯だ。バットレスは静かに、その姿を現わしている。昨日とは違って親しみをもった表情で、これで飯塚も安心して下山できる。

三月二五日 (晴後雪)

CⅡ(七、四〇)―向ノ岳(一一、二〇)―(一一、三五)―CⅡ(一三、三五)

下山する飯塚を送り出して、向の岳へ向う。高橋の腹痛が悪化した

ので、鈴木と共に、北岳への分岐からCⅡへ戻す。凧は西から強く吹くので、夏道を行くのはつらい。雪は飛ばされてほとんどない。北岳小屋への分岐から先は、ほとんどラッセルの必要ない雪面を行く。東側に大きく雪庇が出ている。凧が強く、身体を西側に倒して歩いているので、凧が止むと倒れそうになる。中白根を越えて、岩がげにツェルトをかぶり昼食にする。同じような登り降りを経返してあきてきた頃、向ノ岳に到着。ガスが発生し始めたので直ちに帰途につく。凧はや、弱まり歩き易くなる。CⅡにつくと向もなく雪が降り出した。CⅡ最後の夜なので、大いに食い、腹一杯飲み、名残りを惜しむ。雪は雨に変わった。

三月二六日 (雨後雪)

CⅡ(九、一〇)―砂松(九、四五)―池山小屋(一一、五五)―(一四、四五)―荒川小屋(一七、三五)

今日は案な行程なので荒川小屋でのんびりしようとしたがあてがはずれた。雨は雪に変わり、凧は南から吹いている。折角固まった雪も、雨のため柔らかくなり、ブスブスもぐる。ガスの中のバットレスに別れをつけて砂松を下る。森林帯に入ると凧はない。足どりは重く、思うように進まない。中山はおくれ、しかも道から二ばれ、いよいよおくれる。約一時間おくれて池山小屋に入る。因縁キリスト教大の西高先輩とかに会い、チョコレート等をいたぐく。昼飯を終って出発。雪も止み、明るくなってきた。しかし、雪の状態は極めて悪く、重荷と共に



に苦しむ。池山で高橋、中山がおくれた。関谷、林がそれぞれついて下る。高橋大きくおくれ、ジグザグ上部で、うす暗くなってきたので、関谷が荷物を背負い下る。上部は少し残った雪が氷化し、荷物を背負っては仲々危険である。夕闇せまる頃、三十分おかれて中山、林、更に三十分おかれて高橋、関谷到着。高橋はザックのバンドでしめられ腕がやられてしまった。ぬれたシロフの中に最後の夢を結ぶ。

三月二十七日 (晴)

荒川小屋(八、一〇)―鷺佳山(一〇、三五)―一、〇〇(一)夜  
又神トンネル西口(一二、一五)―一四、〇五(一)芦安(一五、二〇)  
下山の日に晴れるとは有難い。鷺佳山の登りはアイゼンをつける。氷化した雪に、腕の不自由な高橋は難攻する。荷を軽くする。雪は高さ八十米位で消え、雪どけの早さにおどろかされる。中山、高橋は相変わらずおくれる。しかし、今日は付添いなしにする。傾斜はきつい

雪がなくて歩き易い。野呂川林道へ出ると強い風が吹きつける。さすがに平な道に出ると足が速くなる。しかし中山はおくれる。夜又神トンネル西口で昼食にする。日は当たっているが、北岳方面はガスで何も見えないのが残念だ。先刻迄見えていたトンネル東口が見えなくなつた。スワツ一大事と、心配と好奇心をもって入って行く。真中過ぎても未だ見えない。東口に近くなるとガスが現われ、更に進むと東口がボンヤリ見えてきた。振り返ると、西口は見えない。東口を出るとガスが一杯で何も見えない。謎にとけた。あれ程おくれた中山も荷物を

軽くすると、みんなにっついて来る。もうすぐバスに乗れると思つと嬉しいのか、足が速い。芦安へ着くと丁度、バスが出るところであった。バスの中でホツとしたのかみんな顔に笑みが現われ、おしゃべりが始まった。

(林)

### 写真説明

1. 鹿島槍南峰 吊屋根より

鹿島槍を目前にして、切戸での三日向は連日の猛風雪に襲われ、食糧節減と日教不足に土壇場まで追いつめられたが、四日目にして天候は我々に味方し、吊屋根に飛び出した我々を雪のピラミットが雪煙も上げず静かに迎えてくれた。下に広く根を張り、上に天を突かんとするその姿は我々に力を与えてくれる。左方黒く見えるダイレクト屋根も何日か訪れることができるだろう。

昭和三十三年一月八日撮影

町田 明

2. 広河原沢奥壁

ハケ岳最悪の沢とも云われ、未だに人を寄せつけぬ正面壁をもつ広河原沢奥壁は覆いかぶさる椋な滝の連続と、今にも崩れそうな荒れた岩壁で仰ぎ見る者を威圧する。中央部稜線までつき上げているニルンゼの略中央にある大滝は無雪期二十米、積雪期で十米あるオーヴァーハンダの滝で毎回登れなかった問題の滝である。左方険悪の相を見せているのがニルンゼ上部で、今後の目標とすべき所である。

昭和三十一年四月三日撮影

小田 尚 於

いよいよ六月である。この月は古人が名付けて水無月と云われる。名に反してどめどめした月である。現代人である私との感覚の相違かもわからない。水の量が多くても少なくても、毎度の椽に苦しめられるのが夏山である。

五年前の夏山縦走の事でした。西高現役を十名ばかり連れて針の木峠から五色ヶ原に抜け、そこから槍ヶ嶽への縦走をした時です。この時は近代名勝負詞に語ってもよいほど計画がスムーズに進行していました。即ち、予定幕営地の一時向前辺りで一人約二貫目の薪を取らせ、目的地に幕営し終ると見定めたかの椽に夕立が襲ってきたのです。これはさて置いて、この年は水が少なく非常に苦節をしました。特に雪がわずかしかない五色原からボーフラ池しかないところ小屋の一日は最悪の水饑饉でした。

日陰で休止をとりに比較的冷えた木の葉に口づけをして咽喉をうるおす真似をした訳です。ところがこの夜、誰であったかはわかりませんが、お母さん、お母あーさん、と叫ぶのです。翌日よく覚えてみました。そして何年向も覚えてみました。どうしてお母さんを叫ばなければならなかったかと云うと、お母さん以外に水をくれる人がいなかったと云う事で納得しました。確かに、神様、など云うよりは切実、且、緊迫した言葉だと思つた訳です。

ところで、こつこつ話したのはたまたま我々にはつきものですが、い

## 山日記より

田 中 奥

わゆる、お袋さん」のしめる地位を、山行計画とか想い出の他に考え、てみますと、それはそれは大変な苦痛を感じていられる椽です。真心二めてニギリメシを作ってくれたのもお袋さんでした。玄閑先でちらつと後をみると立っていったのもお袋さんでした。更に無事に帰って来たのに「やれやれこの子はこんな黒い顔をして……」と、なぐさめてくれるのもお袋さんなのです。

山に登る事自体が親不幸だと云われてしまつては受役の余地がありませんが、せめて帰って来た時ぐらゐあまりぐちを云われたくないのも人情と云うものかも知れません。

そこで私が二年ほど前から実行し始めた事は、山にゆく前に床屋にゆき、一応礼装をしたつもりで出掛けてゆくわけです。

「やれやれこの子は髪をこんなに伸ばして……」とだけでも云われぬのが、さ、やかな親孝行になりやまいかと。

そして又、あれほどまで、お母さん」を思いながら裏切る事があつたとしても、一つだけお袋さんの気持を理解していたと云う事で死んでも神様になれるんじゃないかと、はなはだ失礼な云い方でおわりたいと思ひます。

○ ○ ○

「天気予報は当らないしー本当にそうならうれしくない。自分が是非当ってほしい時にはずれると、文句の一言も出るといふもの。よく考えてみると、気象学は過去の事実の総合的統計からその結果を割り出そうとするものであるから、この合理的推測などの位の信頼度を持つたかとなると又別問題である。そこには知識以外の、所謂力に通じるものが推理の一大要因を成している杯だ。天候で生命迄も支配される山では甚だ頼りない事で、「何の気象台ぞや。予報に頼るな。只参考にせよ」と云わざるを得ない。全くこれでは気象台も、気象学者もそれを養っている我々納税者もたまらない。そこで「精々気象台を利用せよ」

「しーをスローガンに素人予報羅り通る事に相成る。利用といつても、気象台の風呂で汗を流したり、富士山頂測候所のテレビで相様を見ようといつては

はない。「精々天気図を利用せよ」といふのである。これだけは気象台の発表する資料の中で最高の精度を誇っているもの、杯だ。何しろ渾大な費用がかけられているのだから。こゝに至つて、素人気象台南設に一本横槍が入る。「俺達の予報は、高層気象や世界気象図を基礎に、更に専門的検討が施されたもの。素人予報など危険だぞー」である。しかしその専門家ですらあの通りの予報命中率なんだから、自分の判断した予報なら雨に濡れても諦めるより文句の持つて行く所がない。さてこの冬も暖冬々々で過ぎ去る杯だ。アメリカ東岸や日本など

## 気象寸感

松田朝夫

は、大陸の東岸地方に現われる東岸気候地帯で大陸的色彩が濃く寒さは同じ程度の標準より強い。シベリヤに発生する高気圧は世界最大級のもので、強い時はアジア・ヨーロッパをまたがる程であるが、この数年余りこれが発達しない。最近で最も強かったのは昭和二十二年十二月十六日にバイカル湖西方に一〇八五ミリバルという高い記録があるが、今年は一月十二日バイカル湖南方に一〇六四ミリバルを示したのが最高である。年々地獄全般に暖かくなりつゝ、あるという事は通説の杯だ。日本での今冬の平均気温は、十一月が平年より一九度高

め十二九度、明治九年観測開始以来最高記録を筆頭に、十二月八〇度で平年より三三度高くオ三位、一月五〇度で二八度高く同じくオ五位、この分だと正月シルバークのスキー行は、みじめな泥溜りとなりそうである。

例年必ず晴れると云われる文化の日は、東京の過去七十六年間の記録によると確かに雨が少なく、小雨も含めて雨が降つたのは十六回。この杯に毎年特定の日とかその前後に同じ杯な天気の流れられる性質を気象の方では、シンギュラリティ (Singularity、特異日) といつてゐる。暖かい正月が年々シンギュラリティになつて来つては、スキーヤーや、我々山登達にとつて、まさにカッコンシヨックである。

# 再び高校山岳部について

主として都立の場合

田中 将利

今日の新聞は都立広尾高校山岳部員四名が谷川岳で遭難を報じている。それによると学校側も家庭側にもかくれての山行であると主張してみた事を述べている。私は広尾高校の山岳部が、どの様なシステムの部であるか、又どの様な内状かも知れない。しかし遭難したのは事実であり、そこにそれを導く必然的要素があったに遠くないからこゝ起つたのである。私の知る範囲の中の高校山岳部に於て（主として都立）その必然的過程は共通していると見てよい。私もその一人であったが故に、今一度私見を述べたいと思う。

彼等は山に登りたいのである。だが未だ「山」と云うものに対して漠然とした影しか知らないのである。彼は山が知りたいのだ。彼等に良き指導者があれば問題はないのだ。オーに飛びつのが案内書であり山岳雑誌である。案内書は、いったいどんな種類の人間が作るのか。山は静にして動。刻一刻条件が変る。今さら私如きものが云うまでもない。それを何枚かの原稿用紙で書き上げようとする。將に天才というべき何者でもない。これを書く様な天才達は、これを読む人々の受取り方が分っているだろうか。分っていれば絶対に書けない筈だ。絶対に。書く人にとっては、天候の気象は判断出来るかも知れないが案内書を指導者とする様な登山者には、何が危険であるか、又危険とな

ったらどうしたら良いか、書面の上では全く理解出来ないのである。危険に直面してはさへ理解出来ないのである。十年前の中学時代の山行を振り返る度に背筋に冷汗を覚える。例えは雪渓上のグリセード、ピッケルワークは登山技術書に書いてはあるが、その練習方法と練習時の危険性について述べている文献があるかどうか。もう一度云おう。都立高校のみならず多くの高校山岳部には、良き指導者が居るところはあまりにも少いのである。

オニに昨年度教育委員会から都立高校に対する校外活動に關する指令が出された。山岳部もその例にもれず、必ず教師の同行が必要となつた。教師が居れば安全な山登りが出来るとの考えの爲らしい。教師が山に於て有能な人であれば大いに結構なことである。しかし多く都立高校の場合、完全に希望に反している現状を却は知つての上だろうか。ズブの素人の教師が危険に直面して、誤った判断をした場合、どの様な事態が起るか、過去の多くの遭難例を見ても想像に余りある。しかし部は何らこれの対策をも画さず又、考慮もしていない事実はどう解釈したらよいのか。しかも茨つかの山行例まで指令している如き。多くの学校の場合、教師は自ら山の危険、云いかえれば自己の職場の安全の爲に山岳部から遠のこうとしている。生徒を危険な山行から守り導くのではなくして、出来るだけ目をつぶろうとしている。遠慮なく云おう。これは事実なのだ。現に小石川高校に於ては指導（名目上

ですら)する教師がなく山岳部は学校側より解散させられた。解散したら生徒は山登りをしないのか。名目上の指導教師の場合は、強力なOB会を有する学校でさえ、山行毎に学校側からこの山行は学校側が知らないことにしてくれと申込まれている。学校側から家庭にその標を申入れがあれば家庭も山行を禁止するは当然のことである。山に登りたい少年の気持が、これで満足出来るか。学校側が自己の責任上、知らない事にくれとは一体何を意味するか。登山はスポーツとして堂々と教育すべきものであろう。良き指導者もなく、斯様な申入れや、一方的禁止の結果は、生徒達をいたずらに、危険な内緒の山行へと追いやってしまうことになる。

世の案内書を書くお偉い登山家や、遭難批判者共よ。大先生方の云う自殺的遭難を起させているのは一体誰なのか。高校生の遭難が多いと云うお偉方は、この様な事實を知っているのだろうか。東京の高岳連既になく、全国高岳連はお祭りのみが大好きだ。

都は指令を出した以上、高校山岳部教師を教育する義務がある筈である。名実共に判断力の欠しい高校生を指導出来得る教師を養成すべきであらう。さもなければ、それに準じた方策を立て、貰いたいものである。それは急を要する。出来なければ各高校の若い井ノ中の娃的な高校山岳部OB共をたゞき上げる方策が必要である。山登りを楽しくしたいならそして安全にさせるには決して禁止や責任回避であってはならないのである。

尚多くして可少し、これが高校山岳部の指導である。しかし決して放置すべきでない。有名登山家の御理解と二顧を以て願うものである。(五三)

## 西高山岳部近況

▲99A 鳳凰三山 九月二日～三日

田中康、岡谷興、橋本鋼、木原、杉浦、中村乙、蟹沢、秦、高山、

田辺、小林、梶内、原田、川田 (一四名)

▲99B 北八岳 九月二日～三日

篠崎先生、今井、中村晃、(女子)藤田、小木、大石 (六名)

▲北岳池釣尾根 一〇月二日～四日

田中康、沢野、中村晃 (香山偵察)

▲100 塔ヶ岳集申 一〇月一日

田中康以下二三名

(A) 水無本谷―田中康、橋本鋼、中村晃、杉浦、川田、橋本章、鈴木

兼、大石

(B) 源次郎沢―岡谷興、沢野、蟹沢、梶内、原田、藤田、小木

(C) 勤七沢―今井、木原、中村乙、植木、田辺、林隆、秦、中村泰

▲十一月一日付

正部員推薦 橋本鋼太郎 (27)

準部員 秦 武司、梶内俊夫、田辺和彦、川田秀明、高山利忠

原田 勉

▲雲取山集中 十一月二三日

再び凍威の鳥山行は学校より禁止されたため各谷よりの集中は行わ

乳牛山入山行の方策で行なった。

田中康、岡谷興、橋本鋼、中村見、梶内、秦、高山、川田、原田、  
小木、大石

▲101 スキー合宿 (黒菱) 一二月三六) 三〇日

山口(〇B)、田中康、岡谷興、今井、木原、沢野、中村見、中村  
乙、榎木、高山、秦、梶内、原田、川田、小木、大石、鈴木素

▲二月一日付

正部員推薦 中村 晃(28)

▲102 川苔山強化山行 二月三二) 二三日

符田(〇B)、田中康、岡谷興、今井、橋本鋼、中村見、高山、秦、  
梶内、川田

▲103 北岳池釣尾根香山合宿 三月一六) 二一日

林武、小田、飯塚(〇B)

田中康、岡谷興、今井、橋本鋼、中村見、梶内、秦、川田、高山

三月一六日 (晴) 小田、飯塚〇B及び今井以下八名荒川小屋入

三月一七日 (雪) 小田、今井、岡谷、中村、梶内、秦の六名池山

上にC工建設。他の四名はポッカ。

三月一八日 (風雪) 亡馬頭にC工建設、小田、今井、中村の三

名入る。岡谷、秦、梶内はC工へ帰る。BHの飯塚、橋本、高山

川田C工入。林武、田中康東京よりC工入。

三月一九日 (快晴) オニ次アタック隊小田、今井、中村北岳登頂

C工へ帰る。C工隊は八本歯往復し、オニ次アタック隊林、田中、

岡谷C工入。

三月二〇日 (風雪) オニ次アタック隊三名向岳に向うも風雪烈し

く視界狭めて悪く北岳登頂のみにとどまる。C工撤収。小田、橋

本下山。他は八本歯往復。

三月二一日 (晴) バットレス登攀の〇Bと交代して田中以下全員

下山。

今年度(面高オニ二年度)後半は二年部員が充実し、学校側の白眼視  
にもか、わらず、外見にとらわれず着々と内容ある山行を行うことか  
出来た。香山合宿北岳も向岳こそチャンスを選したが、高校生として  
は充分の合宿であったと思う。学校側に認められぬ合宿であるが故に  
〇B中堅を三名付添わせたが、現役のみにても充分成し得る実力があ  
ったことを付言しておく。頼むくば、現役が学校当局より温かい指導  
を受けて山行出来る様になる日が一日も早からんことを期待する。昭和  
廿三年度の予算も最終決定の際十一万円より三万八千円に一方的にけ  
ずられてしまった。山岳部の活動の主体が、校外である以上、これを  
外部に理解させることが、三三年度の一つの目的としたい。(将)

○ ○ ○

堆 石 抄

1957. 9. 10 ~ 1958. 3. 30

1	(63) 六ヶ岳天狗尾根	1957. 9. 22 - 23	田中興, 林壽, 鈴木潤
2	雲取山	11. 2 - 3	田中興
3	(64) 上越国境縦走	11. 14 - 16	福田, 中山, 坂田
4	穂高岳	11. 18 - 24	川口
5	(65) 六ヶ岳稲子南壁	11. 22 - 23	田中興, 松田朝, 鈴木潤
6	白馬岳	12. 21 - 30	川口
7	蔵王スキー	12. 25 - 29	京田
8	黒菱スキー	12. 26 - 30	山口, 現役多数
9	(66) 後立山縦走 及び爺岳より 鹿島槍	1957. 12. 29 - 1958. 1. 9	安藤, 田中将, 田中興, 笹田 町田, 林武, 福田, 岡谷, 小田, 山口, 米野, 松田朝, 成瀬, 鈴木潤, 飯塚, 京田
10	万座スキー	1. 7 - 14	山口
11	細野スキー	1. 9 - 11	笹田
12	万座スキー	1. 12 - 14	川口
13	塩沢スキー	2. 1 - 2	笹田
14	富士山	2. 7 - 8	田中興
15	石打スキー	2. 8 - 9	町田 見里
16	美ヶ原スキー	2. 15	岩崎
17	塩沢スキー	2. 19 - 23	福田, 小田, 米野, 飯塚
18	蔵王スキー	2. 20 - 23	岡谷
19	川苔山強化山行	2. 23 - 24	笹田 現役多数
20	川苔山	2. 28	高橋
21	剣岳遭難救援	3. 4 - 9	田中将
22	(67) 広河原沢Ⅱルゼ	3. 9 - 10	町田, 福田, 岡谷, 鈴木潤
23	北岳(現役) (68) 北岳バットレス	3. 16 - 21 3. 20 - 27	林武, 小田, 岡谷, 飯塚 鈴木潤, 高橋, 京田, 中山, 坂田, (現役) 田中康, 岡谷興, 今井, 橋本鋼, 中村晃, 梶内, 素, 川田, 高山

# 昭和32年度 決算報告

(自32.4.1 至33.3.31)

## 一 般 会 計

収 入		支 出	
31年度繰越金	4,028	会報印刷費	12,300
全上未納入会金徴集分	200	誌印刷費	2,908
< 会費徴集分	3,000	通 信 費	4,116
32年度入会金	800	会 場 費	5,000
全上会費	42,750	器 具 費	24,190
名簿売上	2,800	器具修理費	250
寄 附 金	10,510	貸出金未返済分	2,500
雑 収 入	2,602	雑 費	3,648
		残 高	11,778
計	66,690	計	66,690

## 遭対基金特別会計

収 入		支 出	
31年度繰越金	9,218	夏山現役合宿補助	1,200
全上未納金徴集分	800		
32年度徴集分	1,668		
銀行預金利息	65	残 高	10,551
計	11,751	計	11,751

(保 町 田)



## 編集後記

▽冬山の記録を整理しながら、高橋、中山、坂田等、今後伸びてもらわなくてはならない新人の名前が欠けているのを、今さらながら妙に淋しく感じた。彼等に今後の活発な動きを期待すると共に、彼等を伸ばし導くのに積極的な努力を惜しんではならない。

▽本号より新たに設けた「山日記より」のページは山行記録に記されなかった精神的な面を詰してもらおう、という企画の下に作ったのである。灼熱地獄の椋な夏山で、尻込みしようとする自分に鞭打って登った岩壁で、或は星を眺めながら、心に去来した事を書いてもらいたい。

▽山行記録は紀行文とは違ふのだ、と云うことは分つていても、どう違ふのか、はっきり線

を引くことが出来ないものだから、感心する暇ない、記録文には仲々ぶつからない、原稿用紙をにらんでいても書けるものではない。い、記録文を書こうと思つたら、普段から多くの記録を読んでおくことだ。これは是非全員に薦めたい。

▽編集のバトンを受け継いだばかりで、不手際な点が多く、田中将利氏の手を多く煩わしてしまった。写真真版は米野弘躬氏の好意によつてニ葉入れることが出来た。

次号は夏山をメ切にして九月に出す予定。

(町田)

### 西朋報告 一四号

昭和三年六月一四日発行  
都立西高山岳部OB会

西朋登高会

事務所・東京都中野区大和田町一八〇甲申方  
TEL・(38)〇八七五

印刷所・東京都世田谷区上馬町二ノ三

鶴見孔版社  
(42)八三八〇